

ティム・ダン・インタビュー

ティム・ダンは1952年にアメリカ合衆国オハイオ州北東部の豪雪地帯で誕生。1971年にディラン・ファンになり、1987～92年にファンジン『Look Back』の編集に携わり、1993～2004年には『On The Tracks』（今はもう廃刊）にも関与していた。ティムは、著書本第1号の『I Just Write 'Em as They Come: An Annotated Guide to the Writings of Bob Dylan』を1990年に出版して以来、ディランの著作物から歌集、歌詞、楽譜に至るあらゆるものを調査した一連の本を発表をしており、今年後半には最新本『The Bob Dylan Copyright Files 1962-2007』がAuthorHouseからリリースされる予定である。

ティムは現在は退職しているが、オハイオ州のジオーガ郡図書館に司書として30年以上勤務し、最後の15年間は目録部部長を務めていた経験の持ち主だ。そんな彼が2008年7月にザ・ブリッジの質問に答えてくれた。

●ティム、マイケル・グレイの『The Bob Dylan Encyclopedia』によると、1971年にディランの作品に興味を持つようになったそうですが、具体的にどんなものが、ボブ・ディランに興味を抱くきっかけになったのでしょうか？

1971年10月にオハイオ州ボウリング・グリーンにあるレコード店にいた時に、陳列棚に面白そうなアルバムがあるのが目に入り、何かが私にそれを買えと語りかけたのです。『GWW Sing The John Birch Society Blues』は私が手に入れた3枚目のディランのアルバムで、最初のブートレッグでした。これには、正規にリリースされたアルバムやラジオから知ったディランではない、魅力的な音楽が入っていました。その後、『The Royal Albert Hall Concert』を手に入れ、とても圧倒されました。

『Highway 61 Revisited』や『Blonde On Blonde』に対する「深い洞察」を得ることが出来たのは、あの頃に、こうした「課外活動」を行なったおかげかもしれません。それから間もなくして、完全にディランにハマったことが分かり、収集活動が始まりました。

●ディランのコンサートを初めて見たのは、いつ、どこですか？ いわゆるネヴァー・エンディング・ツアーはたくさん見ているでしょう？

1978年10月20日にオハイオのリッチフィールド・コロシシウムで離婚慰謝料捻出ツアーを見ました。約30年経った今でも、エキサイティングなコンサートだったという記憶があります。その証拠のテープがあるのは本当に嬉しいことです。こんなことを言うところの雑誌の読者の皆さんはビックリするかもしれませんが、私はディランのコンサートは10回くらいしか見たことがないのです。最も最近のものは2005年6月26日オハイオ州イーストレイク公演です。私に二の足を踏ませているのは、ディランとか彼の歌とかではなく、観客の行動の中にある何かなのです。1996年のクリーヴランド公演以来、ステージに登場するのが誰であろうと、コンサートには金輪際行くものかと心に誓ったくらいです。

●ディランの活動は長期に渡り、バラエティーにも富んでいます。あなたはどの時期が最も好きですか？ どのアルバムを一番愛聴していますか？

21世紀のディラン----『Love And Theft』と『Modern Times』----が私の耳にとっては素晴らしい時期です。本や雑誌で目にする記事から判断すると、これはあまり一般的な意見では

ないでしょうが、今のボブの音楽はおとなのためのおとなの音楽であって、1960年代の「Fun Fun Fun」みたいな、年配の人にはバカバカし過ぎてステージでは歌えないようなものとは違います。良さが分かるのに終わってから数年かかりましたが、ローリング・サンダー・レビューの頃は今でもいいと感じます。でも、『Street Legal』や1978年のリハーサルが私の好きな時期です。あの頃からずっと、このアルバムが私の人生のサウンドトラックとしてヘヴィー・ローテーションで流れているからでしょう。

●あなたは5年間ファンジン『Look Back』の編集に携わっていました。このファンジンを始めたきっかけや、読者や協力者は何人くらいで、どんな人がいたのか、どうして発行を止めてしまったのか教えてください。

1984年にミッチ・バースが『Look Back』を始めたのです。私は最初は単なる読者でした。ある時点から、ラリー・ハンセンとケン・ケイランが雑誌を引き継ぎ、数年間素晴らしいファンジンを作っていましたが、何らかの理由でラリーから私に「引き継がないか」という電話があったのです。ロブ・ホワイトハウスが私と一緒に編集作業をしてくれることになり、私は30号まで頑張りました。世界に数百人の読者がいましたが、読者イコール協力者でした。執筆者の中にはグレン・ダンドラス等の有名人もいました。私が『Look Back』を降りてからも2号ほど出ています。だから、私は終焉には立ち会っていませんし、その詳しい理由も知りません。

●あなたが出した最初の本『I Just Write 'Em As They Come』のサブタイトルは「An Annotated Guide to the Writings of Bob Dylan」（ボブ・ディランの作品への注釈付ガ

イド)でしたが、この本をまとめるきっかけと主な情報源は何だったのですか？

『I Just Write 'Em As They Come』は、1970～80年代に私が個人的な楽しみのために集めた情報の詰まった7冊の黒くて分厚いバインダーをまとめたものです。一番大きなバインダーは、レコード・リリースやセッション・データ、タイトルのバリエーションが書かれた曲のインデックスでした。私はこれをずっと誰にも見せなかったのですが、ロブに見せたら、彼がそれをローリング・トゥームス（ファンジン『On The Tracks』を出していた出版社）のミック・マクスチョンのところに持って行ったのです。それを使って何かしようと私を説得したのはミックです。私の情報源はグレンやクリントン・ヘイリン、マイケル・クログスガード、雑誌の記事、ロブや私のコレクションでした。図書館で働いていたことも大変役に立ちました。最初の本としてはまあまあ出来でしたが、インターネットともっとたくさんの経験があったなら、もっと良いものが出来たでしょう！

●あなたはその後、ディランの著作権登録作品に関する本をいくつか出版していますが、合衆国著作権局は特に役に立ったでしょうが、他にどんなルートで情報を集めたのですか？ 調査のためにはあっちに行ったり、こっちに行ったりしたのですか？

正直言って、合衆国著作権局はそんなに協力的ではありませんでした！ 多額の料金を要求し（特にブッシュ・Jrが大統領だった時代には）、返事をくれるのに時間がかかり、しかもミスが多いのです。でも、ここが書類の唯一の情報源なので、数年間に渡って、約600件の著作権登録の申し込みや関連書類の写しをもらいました。私が主に利用したデータは『Catalog Of Copyright Entries』（巨大で、字が細かくて、カビ臭い冊子で

した) と、それをオンライン化した『Copyright Office Catalog』でした。書類の殆どは著作権の委託に関するものなのですが、一番びっくりした発見が「Church With No Upstairs」「I Looked As Far As I Could See」「Why Do You Have To Be So Frantic?」という曲が存在することと、サラ・ディランがファントム・ミュージックという会社を持っていることでした。グレン・ダダスの『Tangled』（2004年）とアラン・フレイザーのウェブページ《Searching For A Gem》も大いに役に立ちました。トッド・ハーヴィーの本やザ・ブリッジ誌に掲載された最新記事、ウェブサイト《Expecting Rain》からも、たくさんの糸口を得ました。掘り出し物を見つけるのが上手なことも幸いしました。インターネットと地元図書館のパワーのおかげで、ケント州立大学にある政府文書コレクションを調べに行った時以外は、あまり出歩きませんでしたよ。

●はっきり言って、ディランの著作権登録の詳細なんて一部の人のしか興味ないでしょう。一般的な意味で、シリアスなファンにとって、あなたの本が出たことでどのような恩恵や利益を得ているのでしょうか？

難しい質問です！ ディラン研究の殆どの分野でも、このくらい詳しいことを扱っているでしょうに。私は自分のことを典型的なディラン・ファン／コレクターだと思っています。何よりも前に、私はひとつひとつの注釈を書きました。というのも、他書では十分にカバーできていないと感じたものを知ったり、それについて説明を加えたりしたかったからです。今度の本は、著作権の存在を私が確認することが出来た、ディランの作品の最も包括的なリストです。「Go Away You Bomb」や「Liverpool Gal」は存在し、「Cuban Missile Crisis」や「Dirty Lie」は存在しません。私がここに載せたデータの一部は、録音日の記録と一致しま

せんし（1980年秋にランダウン・スタジオでレコーディングされたマテリアルなど）、カバー・ソングの記録、作曲者クレジットについても議論の余地があります。ディランの初期の曲の多くは、まずは『Broadside』や『Sing Out!』で異なる形で発表されているので、私は腰を据えて解決を試みました。ディランの出版社にも原因があるのです。一部の会社はディランのものではない曲に対して所有権もしくは共同所有権を持っているのです。つまらないデータなどありません。確かに皆に好まれるような本ではないでしょうが、貴誌の読者には、手早く調べることでできるリファレンス・ガイド、データベース、トリヴィア情報の源として利用してもらえらることでしょう。

●『The Bob Dylan Copyright File 1962-2007』はおよそ460ページにもなり、あなたにとってはこれまでで最大規模の本です。ディランの著作権登録の歴史について何か新発見はありましたか？ リサーチにあたって、ニューヨークのジェフ・ローゼンかディランの事務所とはコンタクトを取ったのですか？

この本には予想以上に時間がかかりました。次の『Bootleg Series』が出るまで待ったほうがいいというアドバイスまでありましたが、とにかく、（08年）7月7日まで新データの追加を続けたので、2007年よりも少し後まで網羅しています。私が発見したとても興味深い著作権登録は、『Bob Dylan 1961 Carnegie Chapter Hall Concert』という未発表のサウンド・レコーディングです。トニー・メンデルという人物によって申請がなされています。このテープは最近になって出て来ましたね。著作権局から、ディランのウィットマークとの契約書のコピーももらったので、その情報も使いました。ザ・バンドの曲の中から14曲の著作権がコリー・ミュージックからドワーフ・ミュージックに移動したことを示す書類（ザ・バンドのメンバー5人と

ディラン、アルバート・グロスマンの署名がある) もありました。先にも言いましたが、サラ・ディランのファントム・ミュージックも元夫の著作権の一部を所有しています。「Red River Shore」がトラディショナル・ソングをアレンジしたのではなく、ボブが作曲したものだということか書かれた著作権申請書類のコピーを、出版社からもらいたいです。ボブ側からの公式的な協力に関してですが、それは一切ありませんでした。数年前にローゼン氏に協力を求めて手紙を書いたのですが、返事を受け取ることは既に諦めています。

●今後の出版社プロジェクトは？

新しいデータがある程度出て来たら、小さな補刊を作る予定です。『The Copyright File』の増補改訂版のアイデアがファイルの中にあります。締め切りや目標とかいうものは特になくて、趣味として作業を行なっているのです。今はもう私の手元を離れてしまっているのですが、今回の本の出来具合が気がかりです。本が仕上がって手元に届いたら、私のこれからの計画はもっと明解になるでしょう。

●ザ・ブリッジのためにインタビューに答えてくださって、ありがとうございます。

こちらこそ、テリーさん。ジョンとマイクにもよろしく伝えてください。ザ・ブリッジからインタビューされるなんて、こっちが恐れ入るほど光栄なことです。